

山城知佳子 《肉屋の女》



山城知佳子(1976-)
《肉屋の女》

2016年
HDビデオ (single-channel)、ed. 1/5 21分15秒
制作協力：森美術館
平成27年度購入
© Chikako Yamashiro, Courtesy of Yumiko Chiba Associates

動

物の肉の塊が海中を漂っている。冒頭のこの驚くべきイメージによって、観者は「肉」をめぐる神話的ともいえる物語に引き込まれることでしょう。海の中を浮遊する肉の断片は、何らかの過去の災厄を想起させると同時に、新しい物語の生成を予感させるものでもあります。いったいこの肉塊は、現実の社会や生活とどのような関係を持つのでしょうか。

浜に打ち上げられた肉は、本編の主人公であるマーケットで肉屋を営む女によってさばかれ、海岸の景観を変える道路工事に従事する労働者に提供されます。こうして通常の消費のルートに乗せられたかと思いきや、空腹が満たされない労働者の男たちによって肉屋の女主人が食べられてしまうという突然の展開によって、「肉」がジェンダー構造を含む社会的な文脈で機能するメタファーであることが明らかにされます。あえて図式的にいえば、自然を破壊する「開発」を遂行する「男」が、本作において自然に近い存在として描かれる「女」を摂食するという物語の構造の一端が見えてくるわけです。しかしここで肉の旅程が終わるわけではありません。食われたはずの肉屋の女は体内を思わせる鍾乳洞の中で姿を変え、ふたたび肉の塊となって海へと帰っていくのです。

映像を注意深く見ていけば、この物語を生み出した特定の場所に気づくはずですが。ヒントは映像の中にちりばめられています。肉屋が位置するマーケットの周囲は、そこが軍施設であることを示す「フェンス」によって区画され、軍放出の品々が露店で売られています。さらに亜熱帯の気候や植生、鍾乳洞、肉食の文化などから、何一つ説明はなくとも、作品の舞台が「沖縄」であることは想像がつくでしょう。沖縄の地域性を踏まえることで、「肉」の比喩はさらに強度を帯びて迫ってきます。

この映像の作者山城知佳子は沖縄県出身。これまで沖縄の歴史と現在に向き合いながら、①観光の政治性、②基地の暴力、③沖縄戦の記憶の継承という互いに重なりあうテーマを奏しつつ、それらを女性の身体イメージを核とする映像表現として展開してきました。《肉屋の女》にはこのような彼女の長年の思考が凝縮されています。「肉」のメタファーを媒介に編まれた映像から、共同体の崩壊のヴィジョンを読み取るのか、それとも回復のヴィジョンを読み取るのか。彼女の問いかけは、沖縄固有の問題を超えて、東日本大震災以降の日本や、グローバルに晒された様々な地域にも及ぶ広がりを持っています。

(企画課主任研究員 鈴木勝雄)